

| | |
|------------|---|
| Title | 日本・イスラエル比較文化研究（２） 日本列島は誰が創った？ |
| Author(s) | 大塚, 清恵 |
| Citation | 鹿児島大学教育学部研究紀要. 人文・社会科学編=Bulletin of the Faculty of Education, Kagoshima University. Cultural and social science |
| Issue Date | 2010-03-16 |
| URL | http://hdl.handle.net/10232/9161 |
| Rights | |

*鹿児島大学リポジトリに登録されているコンテンツの著作権は、執筆者、出版社（学協会）などが有します。

The copyright of any material deposited in Kagoshima University Repository is retained by the author and the publisher (Academic Society)

*鹿児島大学リポジトリに登録されているコンテンツの利用については、著作権法に規定されている私的使用や引用などの範囲内で行ってください。

Materials deposited in Kagoshima University Repository must be used for personal use or quotation in accordance with copyright law.

*著作権法に規定されている私的使用や引用などの範囲を超える利用を行う場合には、著作権者の許諾を得てください。

Further use of a work may infringe copyright. If the material is required for any other purpose, you must seek and obtain permission from the copyright owner.

日本・イスラエル比較文化研究（2）

—日本列島は誰が創った？—

大塚清恵*

(2009年10月27日受理)

A Comparative Study of Japanese and Israeli Cultures (Part II)

— Who Built the Japanese Isles? —

OTSUKA Kiyoe

要約

本稿は、鹿児島大学教育学部研究紀要（人文・社会科学編）第58号に掲載された「日本・イスラエル比較文化研究 一日猶同祖論考」の続編である。一般的に「秦氏」と呼ばれる3世紀末から5世紀にかけて朝鮮半島から渡って来たシルクロード渡来人は、時代を超越した高度な知識と技術を持っていた。彼らは、古代日本に技術革命をもたらし、政治・宗教・生産活動・文化を大きく発展させた殖産豪族集団である。この論文は、古墳文化、飛鳥文化を築いた渡来人がイスラエル系であったことを詳述した後、なぜ突然彼らが挙げて極東の島国にやって来たのか？なぜ4世紀から5世紀にかけて一見無意味な巨大古墳を現在の大阪の地に築いたのか？なぜ北九州と畿内が秦氏の拠点なのか？なぜ全国各地に奇妙な三本鳥居の神社を建てたのか？という日本史の謎に対して大胆な一つの仮説を立てた。

キーワード：秦氏、仁徳天皇陵、飛鳥文化、景教、宇宙工学

第一章 秦氏は何処から来たのか？

秦氏の家系図には秦の始皇帝が秦の祖ということになっているが、日本書紀によると弓月君（融通王）が秦氏の祖である。弓月君が帰化した372年ごろ「弓月」という国がステップシルクロードが通過する中央アジア、現在のキルギスのすぐ北方に存在した。弓月国はアラム語を使用し、養蚕や絹織物技術に優れていた。興味深いことにヤマトウという地やテングリ山という高い山があったという。ヤマトウは「神の民」を意味する言葉で、この地名がヤマト（大和）になったの

* 鹿児島大学教育学部 准教授

ではないかと言われている。テンシャン山脈に属するテングリは天神を意味し、秦氏の拠点であった京都の愛宕山は天狗伝説で有名である。

弓月国は、もともと紀元前8世紀に北イスラエル王国からアッシリア人に連れ去られた十部族の中からガド族、ルベン族、マナセ族などが建てた国であると言われている。彼らは弓月国を建国する前は、黒海北岸のクリミア半島にしばらく住んでいたことがある。黒海北岸の平原には紀元前7世紀からベルシャ系遊牧民スキタイ族が住んでいた。スキタイ族は金属武器と馬具で武装した強力な騎馬軍団を組織し、紀元前6世紀には、南ロシア、コーカサスを領域とする広大な騎馬民族国家を形成した。イスラエル人は交易などを通してスキタイ人と連合するようになり、スキタイ・サカ族としてシルクロード沿いの各地で植民、建国を行った。スキタイ文化の影響は、中央アジア、モンゴル、華北にまで及び、その結果、タタール、突厥、匈奴などの遊牧民族国家が生まれた。4～5世紀に日本に渡来した集団の中に、このスキタイ・サカ族が含まれていたため、渡来人は卓越した産鉄、鉄剣製造技術を有していた。

また、弓月国は、650年頃に滅亡するまで景教徒(ネストリウス派キリスト教徒)の拠点であった。ネストリウス派キリスト教はネストリウス(380年～451年)を創唱者とする古代キリスト教の一派で、特徴としてはイエス・キリストの位格は一つでなく人格と神格に分離され、マリアは「人としてのキリストの母」であって「神の母」ではないと考える点である。ネストリウス派キリスト教は、イエスは生まれながらの神ではなく天使がマリアを選び、聖霊の力によって身ごもったと告げた瞬間、聖霊の力によって聖なる人になったと考える。つまりイエスは単に神通力を得た人間というわけである。当時のキリスト教諸派の中で主流であったアタナシウス派(原初ローマ・カトリック)は、イエスを神の子と認めずマリア崇拜を否定したネストリウス派を431年の「エフェソ公会議」で問題視し、451年の「カルケドン会議」で異端宣告をしてキリスト教圏から追放した。イエス・キリストをメシアと認めないのだからネストリウス派は、キリスト教というよりユダヤ教に近い。

ユダヤ教徒とキリスト教徒は、ともにローマ帝国から苛酷な弾圧を受けていたが、4世紀にはいるとコンスタンティヌス帝は313年ミラノで勅令を発し、キリスト教を公認する旨を公布した。これは、キリスト教が爆発的に広がり、4世紀までに住民の1割ぐらいがキリスト教徒になっていたからである。が、コンスタンティヌス帝はユダヤ教に対しては不寛容で、2年後の315年にはユダヤ教に邪教の烙印を押す勅令を公布し、反ユダヤ教政策を強めた。ローマ帝国内における宗教闘争は完全にユダヤ教側が敗北したのである。

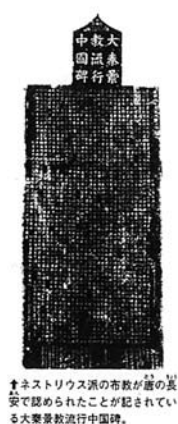
ネストリウス派キリスト教は、発生した時代、教義、布教地域から考えて、ユダヤ教徒が迫害を逃れるために便宜上キリスト教の形を取ったものではないかと筆者は考える。

(注1)

| 項目 | 区分 | 原始キリスト教 | 景教 |
|------------------------------|----|---------------------------------------|--|
| 神に対する解釈 | | キリストの神性を100%認める。 → (AD325年のニケーア会議) | キリストは神としての部分と人としての部分からなる。聖母マリアはキリストの人の部分の母であり、神の母ではない。→ (AD431年のエフェソス会議) |
| 教義の祖 | | パウロ・ペテロ →拠点はエルサレムとアンテイオキア。後にペラに移る | ネストリウス →拠点はコンスタンチノープル及び西アジア各地 |
| 東・西ローマ帝国の所属 | | 西ローマ帝国 (ローマ・パチカン) | 東ローマ帝国 (ビザンチン) |
| 三位一体 (父なる神、子なるキリスト、聖霊は一体) | | 完全に認める →アタナシウス派(正統教義) | キリストの神の部分だけ認める→ネストリウス派 (異端教義) |
| 布教の範囲と対象 | | 主にユダヤ人、ローマ人、ギリシア人 (地中海沿岸に布教) | 中央アジア、中国、朝鮮 (ビザンチン帝国領内、中央・東アジアに布教) |
| 十字架の形 | | たて長のもの →ローマ・パチカン型 | 正十字のもの →ギリシア正教型 |

このネストリウス派キリスト教は、635年にペルシャ人司祭「阿羅本(あらぼん)」によって景教(「光の信仰」という意味)として中国に伝えられた。景教教会は、最初、「波斯(はし)寺」と呼ばれた。波斯は、中国語でペルシャのことである。ササン朝ペルシャが642年に滅亡した後は、「大秦寺」と改名された。大秦とは古代ローマ帝国のことである。初期の唐の朝廷は支配層が北族(鮮卑、匈奴など)的要素が強かったため、景教や仏教などの外来宗教に寛容で布教活動を保護したため、景教信仰は大いに広まった。中国には「大秦景教流行中国碑」という石碑が残っている。

(注2)

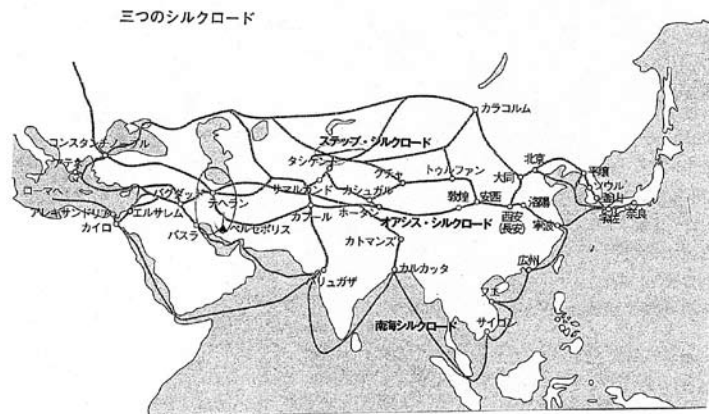


ペルシャ帝国がバビロン捕囚からユダヤ人解放(BC538年)を行った後、一部のユダヤ人はそのままペルシャに定住してペルシャ化し、その後、中国を植民地化することに参画したものが多くいた。秦(BC221年～BC206年)は、実はペルシャの植民地だったのである。(注3) 始皇帝が徹底的な思想弾圧のため「焚書坑儒」を行い、書物を焼き、数百人の批判的な学者を生き埋め

にするという残酷な行為を平然と行えたのは、始皇帝自身が中国人でなかったからだ。始皇帝は赤毛で青い目をしたイラン系月氏の血を引く西洋人で非アジア的な顔をヴェールで隠していたという。^(注4) 2006年6月28日の新華社電によると始皇帝陵の墓から出土した人骨がペルシャ系のDNAと同じ特徴を持つ男性の骨と分かった。^(注5) 武力による異民族支配は長くは続かないものである。始皇帝の死後、秦はすぐに漢民族に滅ぼされた。「秦人」は、中国よりさらに東の地に新天地を求めざるを得なくなった。

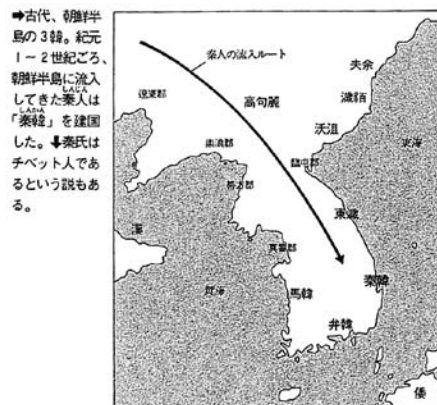
弓月国からステップ・シルクロードを東進しても、ペルシャから中国国内を横断するオアシス・シルクロードを進んでも、行き着く果ては朝鮮半島である。

(注6)



イザヤの預言が正しければ海の向こうの島々で出来た国(日本)から「行く先々で勝利を収めさせる」メシアが出現するはずだ。古代イスラエル人は、何としても朝鮮半島内に侵入しなくてはならない。中国の歴史書『三国志』の中の「魏志韓伝」によると朝鮮半島には初め馬韓しかいなかったが、「秦人」が無理矢理侵入してきて、数が増え始めたため西方の地を分け与えたという。^(注4) そこに秦人は、秦韓を建国し、後に辰韓と名を改めた。秦人であることを隠すためだろう。

(注7)

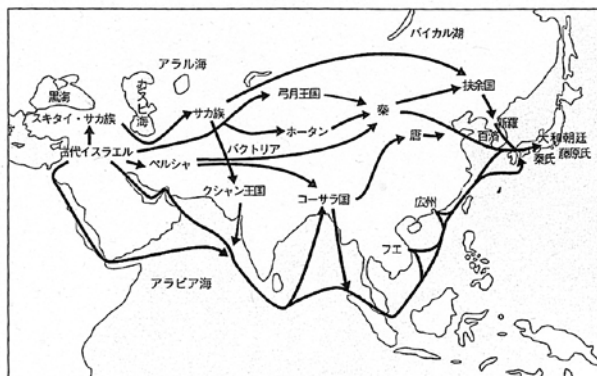


辰韓は12カ国に分かれていたという。12という数字が好きなところにイスラエル人の特徴が出ている。馬韓と辰韓に挟まれた弁韓も秦人が創った国だった。紀元前2～1世紀頃に、馬韓・辰韓・弁韓の三国連合が形成される。4世紀にはいると馬韓は百済に、辰韓は新羅に、弁韓は任那(加耶諸国)に変わり、最終的には新羅が朝鮮を統一国家にする。聖書研究家の久保有政氏は、ローマを漢字で書くと「羅馬」なので、朝鮮半島に建国した国を新羅馬と命名し、縮めて新羅にしたのではないかと見ている。(注)ユダヤ人は、世界各地に散りながら建設した街や国をニュー・○○と名づけるのでこの説は説得力がある。

ユダヤ人は、行く先々で国家統一を行う。最終目標は世界全体をワン・ワールドにすることだからだ。

古代イスラエル人集団は、第15代応神天皇(在位270年-310年)の代に、イザヤの預言通り世界中から島国日本に渡って来た。

(注9)



古代イスラエル民族、秦氏の移動図。

第二章 秦氏は何故日本に来たのか？

北イスラエル王国はアッシリアにBC722年に滅ぼされ、南イスラエル王国はバビロニアにBC587年に滅ぼされた。イザヤは二人おり、第一のイザヤはBC720年頃、第二のイザヤはBC545年頃に預言活動をしている。東方の島々から救世主が現れると預言したのは第二のイザヤの方であるが、放浪するユダヤ人が日本に渡来したのは、応神天皇の御代である。なぜ、この時期を選んだのだろうか。それは、ユダヤ人のメシア思想と前述したゲマトリア数秘術と関係がある。祖国を失い、世界各地に離散したユダヤ人はメシアが出現し、ユダヤ人を救済してくれることを期待していた。メシアのゲマトリアは358なのである。

(注10)

$$\begin{array}{l} \text{メシア} \quad \text{ヤシマ} \\ \text{נִשְׂמָךְ} \quad \text{נִשְׂמָךְ} \\ 8+10+300+40=358 \end{array}$$

3 + 5 + 8 = 16 なので 16 もメシアと関係した数字である。また、ユダヤ人は 3 を聖数と考えている。実際、BC333 年には、アレキサンダー大王 (BC356 年～ BC323 年) が、ペルシャ王ダリウス 3 世を撃破し、アケメネス朝ペルシャを滅ぼし、エジプトからインド西部にまたがる大帝国を築いた。この快挙はダニエルの預言の中であった。ユダヤ人は、預言者の預言と年号、緯度、生年月日などの数字を重視するのである。応神天皇の次の仁徳天皇 (在位 313 年 - 399 年) は、第 16 代目である。おそらく、これが応神天皇の御世にユダヤ人が大挙して渡来した理由だろう。

しかし、それでも謎は残る。東方の島々は日本以外にいくらかでもある。何故、日本を選んだのだろう。それは、おそらく日本の特異な形状のせいであろう。古事記には、イザナミが日本列島「大八島」を生んだと書かれているが、確かに神様が意図的に世界の四つの大陸、北米、ユーラシア、オーストラリア、アフリカを縮小して繋ぎ合わせたような形をしている。

(注 11)

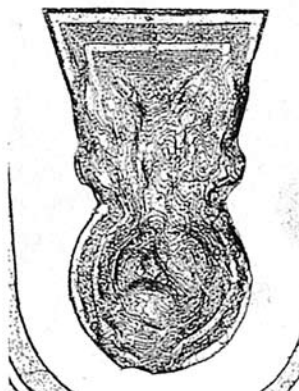
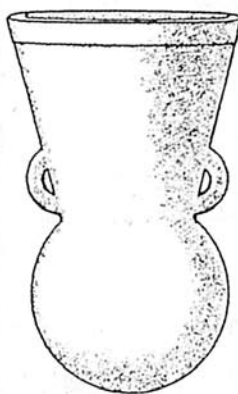


北海道は北米に、本州はユーラシア大陸に、四国はオーストラリアに、九州はアフリカに似ている。紀伊半島をアラビア半島に見立てると、ちょうど現在の大阪の和泉がイスラエルにあたる。京都・奈良はメソポタミア、琵琶湖はカスピ海、伊勢湾がペルシャ湾にあたる。淡路島はトルコ半島にあたり、小豆島はギリシャにあたり、ギリシャと同じようにオリーブが植えられている。瀬戸内海は地中海に、山口はイベリア半島に、島根半島はスカンジナビア半島に、能登半島はタイ

ミル半島に相当する。北九州はエジプトにあたる。このことに気づくと、なぜ、秦氏が畿内と播磨そして九州北部を拠点としたかが理解できる。伊能忠敬（1745年～1818年）が、日本地図を作成する1500年前にユダヤ人は、日本列島の形状を知っていたのである。渡来したユダヤ人は、仁徳天皇がアレキサンダー大王のように世界を制圧する英雄豪傑になってくれることを期待していたと思うが、実際の仁徳天皇は、温和な慈悲深い人物で凶作の年には免税をしたり、大規模な治水工事を行った聖帝として記紀にしろされている平凡な天皇だった。退位年月日は、399年1月16日。16日を選んだのは、前述したように16がメシアを表す数だからである。ユダヤ人たちは落胆したが、天皇の没後、次々に巨大な古墳を築いた。大阪生まれの作家飛鳥昭雄氏は、前方後円墳は三種の神器の一つであるマナの壺を表わしているのではないかと推理している。

(注12)

→^{つくりだ}造出しに注目して、^{ぜんぽうごころ}前方後円墳を上下引っ繰り返すと（下右）、モデルは取っ手のついた^{つぼ}壺（下左）であることがわかる。これは、ガド族が持っていた古代イスラエルの神器、マナの壺がモデルである。



筆者は、この巨大古墳は天神を引き寄せるためのランド・マークであったと思う。この点については後で詳述する。飛鳥昭雄氏の本によるとアメリカ政府は終戦時に仁徳天皇陵と応神天皇陵を古代の秘宝や古代史資料を求めて発掘したという。

(注13)



↑←仁徳天皇陵を発掘調査したアメリカ第6軍の特殊部隊。上は仁徳天皇陵の門番の前の兵士たち。左上は今の国道310号線付近から天皇陵をうかがう部隊。左下は発掘調査に向かうところ。



エジプトのピラミッドと同じように高価な財宝が埋蔵されている巨大な天皇の陵墓が盗掘されないはずがない。米軍が発掘するずっと以前に、日本人が発掘したらしく、明治41年には仁徳天皇陵からの出土品が既にボストン美術館に所蔵されていたというから驚きである。日本の古代の秘宝がアメリカに奪われたことは残念である。

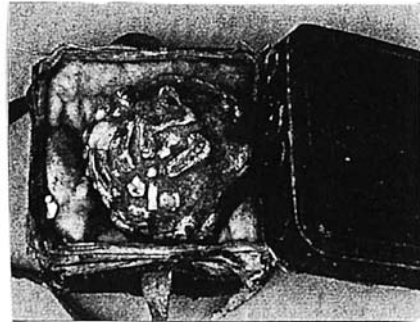
第三章 飛鳥時代（推古時代）は 20 世紀の前触れ

マナの壺の形をした大古墳は、4世紀から6世紀中ごろまで盛んに造られたが、538年に仏教が公伝すると、平面的広がりを持つ前方後円墳に代わって、垂直に伸びる高い塔や鳥居とお堂がワンセットになった神社が建設されるようになった。天神を引き寄せるためのランド・マークが変わったわけである。古墳時代が終わり、飛鳥時代（6世紀末～7世紀前半）が到来する。飛鳥時代には、支配者層がイスラエル系であったことが明確に表れている。飛鳥時代の立役者と言えば、蘇我氏、聖徳太子（574年～622年）、秦河勝（生没年不詳）をすぐ思い浮かべるが、蘇我馬子（?～626年）の名前は「我、蘇りし馬子（＝キリスト）」と読める。つまり、復活したキリストというわけである。蘇の字の中に魚が入っているが、魚は隠れキリスト教徒のシンボルである。^(注14) 蘇我馬子のライバルであった物部守屋（?～587年）のモリヤはエルサレムの古名である。『日本書紀』に記されている聖徳太子誕生譚によると、聖徳太子の父親は用命天皇、母親は穴穗部間人（あなほべのはしひと）で、間人皇后の夢の中に西方から来た救世観音菩薩と名乗る僧侶が現れ、間人皇后に懐妊を予言する。予言通りに間人皇后は懐妊して聖徳太子を身ごもるが、ついうっかり馬小屋の戸に当たってしまったため急に産気づいて聖徳太子を出産、厩の戸に当たって生まれたので、聖徳太子は「厩戸皇子」と名づけられたという。この話は、明らかにマリアが天使ガブリエルから受胎告知を受けて馬小屋でキリストを生んだというイエス誕生譚の換骨奪胎である。仁徳天皇がメシアでなかったことに落胆した秦氏は、飛鳥時代に聖徳太子というメシアを作り出そうとしたのだろう。

6世紀大和朝廷の最大の問題は、仏教を信奉するか否かであった。仏教信奉者の蘇我馬子は、587年に反仏教派の物部守屋を滅ぼして政権を掌握すると、勢いに乗って592年には崇峻天皇（在位587年～592年）を暗殺する。崇峻天皇の後継者である女帝の推古天皇（在位592年～628年）は第33代天皇である。前述したようにユダヤ人にとって33は聖数である。第33代天皇は特別に重要な天皇である。第33代天皇の顕著な特徴は、何と言っても女性であるということだ。史上初の女帝である。推古時代の特徴は、女性の地位が高かったことである。第35代皇極天皇（在位642年～645年）も女性で、皇極天皇は第37代齐明天皇（在位655年～661年）として再び皇位に就いている。現在の日本では、女性は天皇になれない。男女同権という点で飛鳥時代の方が先進的である。推古天皇の摂政として聖徳太子は国政改革に当たった。聖徳太子は冠位十二階の制を定めて「能力主義」という新しい原則を打ち出した。冠位は姓と違って、才能や功績に応じて個人に対して与えられるもので、次第に昇進することができた。世襲的な氏姓制度の枠を破り、能力のある者を役人として採用しようとしたのである。また、憲法十七条を制定し、豪族たちに為政者としての心構えを説いた。推古天皇が即位したとき聖徳太子は、まだ18才だった。推古時代の大胆な改革（女性の地位向上、能力主義、憲法にもとづく政治）を行なったのは聖徳太子の後ろ盾だった秦河勝だったのかもしれないが、誰が行なったにせよ飛鳥時代の国政改革は20世紀的な社会改革である。

20世紀的なのは政治面においてだけではない。科学技術面においても20世紀的なのである。推古時代、豪族たちは古墳に代わって仏塔や寺院を次々に建立するようになった。蘇我氏は飛鳥寺（法興寺）、聖徳太子は斑鳩寺（法隆寺）、秦河勝は蜂岡寺（広隆寺）を建てた。法隆寺を調べると時代を超越した驚くべき物が見つかる。例えば、法隆寺には地球儀が存在する。

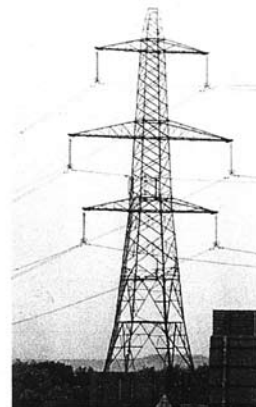
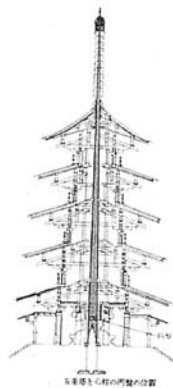
(注15)



石で出来ているソフトボール大の地球儀はアメリカとオーストラリアが欠けているので大航海時代以前に作られた古いものであることがわかる。日本を見れば北海道がなく異常に沖縄が大きい。アフリカに当たるところには漢字で「食人国」と書かれている。古代史学者の小林恵子氏は西突厥製と推理している。

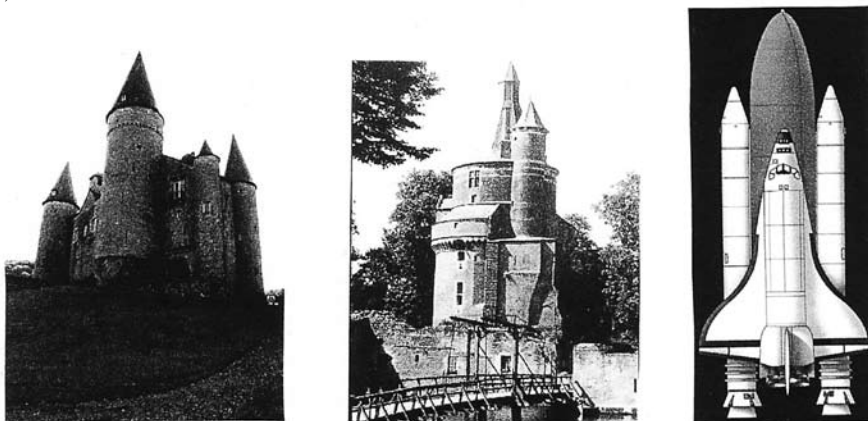
もう一つの驚くべき物は、法隆寺の五重塔である。607年に建てられた法隆寺五重塔は、日本に建てられた五重塔第1号だが、その設計図から見て、明らかに送電塔の模型である。

(注16)



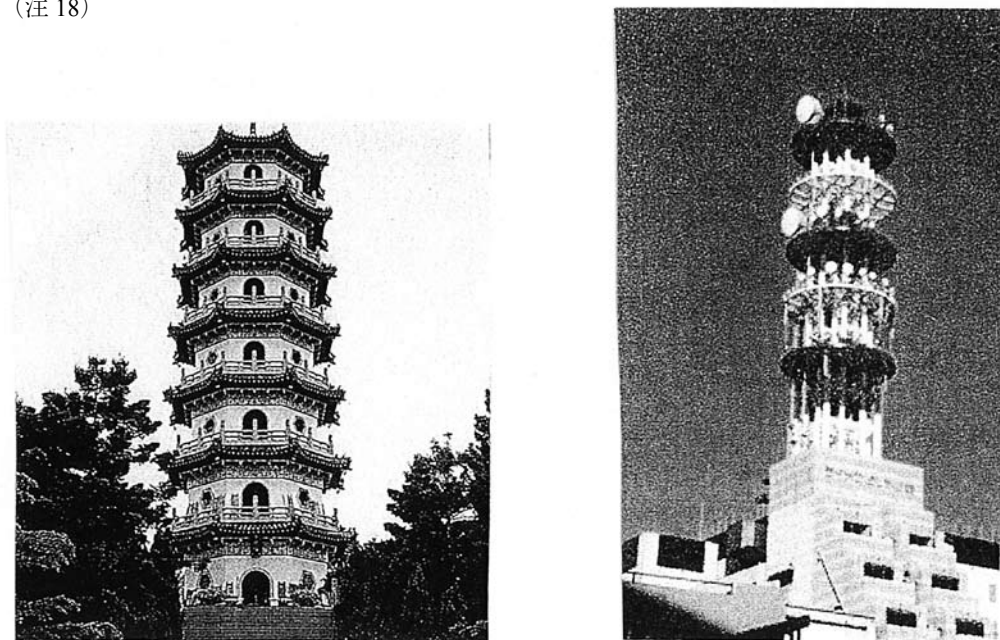
これは、一体どういうことなのか。日本以外の国々に建てられた塔も 20 世紀に花開いたハイテク文明の産物の模型に見える。例えば、ヨーロッパ、中東、インドにある尖塔のある城は、数個の燃料タンクをくっつけて宇宙に飛び出そうとしているスペースシャトルそっくりだ。

(注 17)



台湾にある神塔も、今、私たちの町のあちこちに建てられている円筒形電波塔によく似ている。

(注 18)

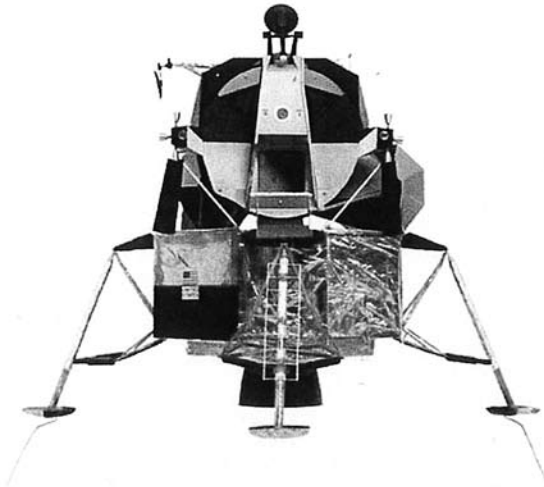


話を飛鳥時代の建築に戻そう。秦河勝が建てた広隆寺の近くに「蚕の社」と呼ばれている神社がある。この神社は、不思議な三柱鳥居があることで有名な神社である。秦氏は景教徒であったから、この三柱鳥居は三位一体を象徴するというのが一般的解釈だが、つじつまが合わないこじ

つけの解釈である。三位一体とは、神には三つの位格—宇宙創造主である父なる神、神の子イエスおよび聖霊という三つの側面があるという考えで、キリストを神の子と認めなかったばかりにキリスト教圏から追放された景教徒が三位一体の象徴として三柱鳥居を作るはずがない。

秦氏の祖は弓月君、そして秦の始皇帝は月氏の出である。つまり、秦氏は月と特別な関係があった一族と考えられる。筆者は三柱鳥居も20世紀ハイテク文明の落とし子の一つだと思う。それは、月着陸船である。三柱鳥居は月着陸船の三脚部分と考えて間違いないと思う。

(注19)



月着陸船を分解して着陸用三脚を鳥居にし、上に乗っていた部分をお堂として屋根をのせれば、「神社」の出来上がりである。

神武天皇の東征の際、高天原の神タカミムスビに遣わされて道案内をした八咫鳥は三本足とされているが、鳥に足が三本あるはずがない。月着陸船が降下すると、回りの植物が枯れるのでカラスと呼ばれるようになったのだろう。八咫鳥(やたがらす)の「や(あ)た」は大きいことを意味する。八咫鳥とは大きい宇宙船ということである。

(注20)



また、月着陸船が興(コウ、おき)、輿(ヨ、こし)、鼎(テイ、かなえ)、只(シ、ただ)という漢字によく似ていることにも気づいてほしい。

飛鳥昭雄氏の説明によると、私たちは神社に参拝するときは、ギザギザの白い紙垂（シテ）が垂れ下がっている注連縄の下で鈴を鳴らして大きな音をたてるが、それは鈴の形をした神輿が出現し、稲妻が走り、雷鳴が轟いている様子を再現しているという。あのギザギザの紙垂は、稲妻、電光を表わしている。天という字は、工人と書く。工人とはエンジニアのことである。神社に奉られている神は、意外なことに工学の神様なのである。

第四章 電電宮と速玉大社

日本の寺社の神が工学の神である証拠に京都の嵐山虚空蔵山町には「法輪寺鎮守社 電電宮」なるものがある。「法輪寺鎮守社 電電宮」の歴史をたどると四世紀にまでさかのぼる。四世紀すでに現在の法輪寺辺りに三光明星尊を奉った「葛野井宮（かずのいぐう）」があったという。葛野井宮は弓月君が一族祖神として信仰していた虚空蔵尊と深い因縁があったという。古代人は、隕石落下などの現象から鉱物を星神と関連づけ信仰に結び付けていた。虚空蔵とは明星、つまり金星のことである。ちなみに妙見神の妙見は北極星のことである。^(注21) 秦氏は、金星を崇拝していたわけである。西洋では金星の神にはビーナス（美と愛の女神）とルシファー（墮天使、よく悪魔と同一視される）がいるが、日本では虚空蔵菩薩と呼ばれている。

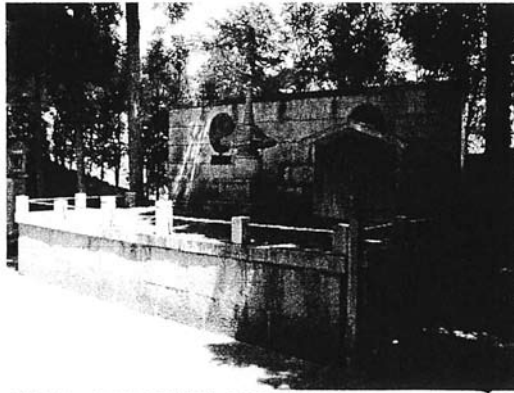
4～5世紀には、葛野井宮を求めて帰化人たちがぞくぞくとこの地に渡来し、進んだ農業技術や文化工芸をもたらした。その結果、初めは何も無い鄙であった葛野井付近の地域はだんだん開発されて豊かになり、文化工芸の中心となった。

奈良時代、元明天皇の和銅6年（713年）、この由緒ある地域に、勅願により堂塔が建てられ、秦氏が崇敬していた葛野井宮は「木上山葛井寺（もくじょうざんかずのいでら）」と呼ばれるようになり、国家安全・万民繁栄・豊作・産業の興隆を祈る勅願所になった。この葛井寺（清和天皇の貞観10年、西暦868年に「法輪寺」と改名）は、歴代天皇の勅願寺であっただけでなく、日本仏教の高祖、宗祖である勤操大徳（ごんぞうたいとく：弘法大使の恩師）、弘法大師、興業大師、明恵上人、日蓮上人などが、この寺に昼夜こもって祈願し、悟りを開いたという。

弘法大師の弟子の中から、道昌僧正（どうしょうそうしょう）という工学に優れた高僧が現われ、承和年間（834年～847年）、勅願によって大堰川を修築し、橋を架け、船筏の便を開いた。このとき、架設された橋が、のちに法輪寺橋と呼ばれるようになった橋だが、法輪寺橋は亀山天皇（在位1259年～1274年）から「渡月橋」と命名された。ここにも天皇家の後ろ盾である渡来人たちの月に対する特別な思いが表れている。道昌僧正が百日間の求聞持法（ぐもんじほう：虚空蔵菩薩を本尊とする記憶力を増大させる修行）を行い、満願の月に井戸で水を汲んでいると、明星が天空より降り注いで、虚空蔵菩薩が来迎したと伝えられている。本尊の顕現としての明星天使、「電電明神」を主神とする「明星社」が鎮守社のひとつとして奉祀された。この神社は、残念ながら元治元年（1864年）の禁門の変の際、堂社ともども消失してしまった。現在の「法輪寺鎮守社 電電宮」は、戦後、それまでの仮宮であった社殿を電気電波関係業界の発展を祈願して新たに再建したもので

ある。昭和44年には大阪万博を記念して新社殿が再興された。電気研究者の代表者としてエジソン、電波研究者代表としてヘルツの胸像が境内に掲げられている。

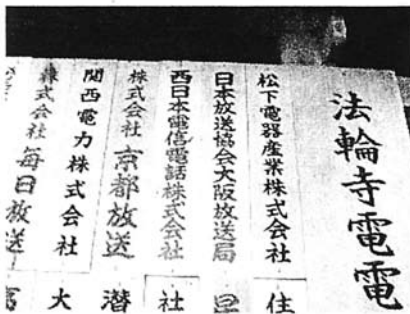
(注22)



法輪寺境内にある電気電波関係者の堂を顕彰する塔です。
電気研究者の代表としてエジソン、
電波研究者の代表としてヘルツの胸像が掲げられていました。

昭和54年には、「電電宮護持会」が結成され、電気・電波・電力に関連した日本の大企業が加入している。

(注23)



和歌山県新宮市には、宇宙船そのものを祀っているような名前の神社がある。それは、熊野速玉神社である。

(注24)

熊野速玉大社



創建年代は不詳であるが、元宮の神倉神社（かみくらじんじや）は、非常に古く 128 年に創建されている。熊野速玉大社の主祭神は熊野速玉大神と熊野夫須美大神（くまのふすみのおおかみ）で古事記のイザナギとイザナミに当たるとされている。両方とも、もともとは、付近の神倉山の盤座（いわくら）に祀られていた神である。

（注 25）

神倉神社



神倉神社を参拝するには、源頼朝が寄進したと伝えられている急勾配の石段を 538 段も登らなければならないので交通の便がいいところに熊野速玉大社という新宮を建てたのだろう。ユダヤ人は、33 を聖数と考えているが、興味深いことに熊野速玉大社と神倉神社は北緯 33 度 43 分に位置している。神倉（かみくら）は、正しくは「神座（かみくら）」と書かれるべきで山上にはまさしく神が座するにふさわしい神秘的な巨岩がある。御神体として祀られているこの巨岩は、ゴトビキ岩（方言でヒキガエルのこと）と呼ばれている。

（注 26）



2000 年前から熊野信仰は存在し、熊野の神官と山伏に対しては天皇でさえ一目置いたという。山伏は、フィラクテリーと呼ばれる黒い箱を額につけ、ショーファーと呼ばれる角笛を吹くユダヤ教徒の姿にそっくりなのである。日本に渡来した「失われた十部族」は、アラビア半島に相当する紀伊半島の北緯 33 度線上地域を信仰の中心として選んだのだろう。最初、熊野にしかなかった熊野神社は、時が経つにつれて全国に建てられるようになり、江戸時代には三万以上の熊野神社が存在したという。

第五章 日本の地名の謎解き

下呂、登呂、只見、乗鞍岳、甲突き川、利根川、常盤、更科、英虞湾……日本の地名は意味不明なものが多い。日本人の神仏が月着陸船のような形の宇宙船で飛来する神であるならば、一見、無意味な日本の地名も宇宙船と何らかの関係があるはずだ。この観点から日本中の地名を研究し、みごとに地名の謎を解いた橋野昇一という人がいる。大阪大学卒の医師である橋野昇一氏は、41歳のとき(1965年)、新宮市内のある中学校の校庭で30人ほどの人とUFOを目撃したことがきっかけで、熊野速玉大社の「速玉」とは高速飛行する丸い物体、つまりUFOを指していることに気づき、日本中の寺社の名前と地名を調べるようになった。橋野昇一氏が数十万の地名の中から2万ほどの地名を拾い、分析した結果、大部分の日本の地名は、①宇宙船、②光り輝く宇宙船、③高速で飛ぶ宇宙船、④三機の宇宙船、⑤宇宙船を見る、⑥宇宙船を待つ、迎える、入れる、⑦宇宙船が降下する、着く、⑧宇宙船を飛ばす、打ち上げる、のいずれかを意味していることがわかった。橋野昇一氏は、長年の地名研究の成果を数冊の著書にして公表している。^(注27) 地名の隠された意味を見つける方法をかいつまんで説明しよう。

(1) 宇宙船を表わす文字

まず、前述したように興・輿・鼎は着地用の脚を出した宇宙船の象形文字である。爪は着地用の三脚を表わし、市・常・只・円・丹・六・呉・穴・貝なども着地用の三脚を出している宇宙船を表わす。

邑と卷は、回転している宇宙船を表わす。

呂と串は、二機の宇宙船がつながっている様子を表わしている。

三脚をひっこめて飛行している宇宙船は、その形から、釜・鍋・笠・立・帽・鈴・鐘・蓋・壺・盤・皿・玉・丸・鞠・豆・口・古・曲・石・輪・矢などの字が使われる。

細長い葉巻型宇宙船は、筒とか長尾などと呼ばれる。

生き物に例える場合は、鳥が一番多く、鳥・鴨・雁・鶴・鷺・鵬・羽で表わされる。

他の生き物系の宇宙船を指す隠語は、熊・鹿・亀・馬・魚・鯨・虫・牛などである。

光り輝く宇宙船は、光・星・火・日・月・赤・紅・由・音(日立を一つにまとめた字)などの文字が使われる。

舟・船・車などは、わかりやすい直接的な宇宙船の表現である。倉敷、倉橋、乗鞍岳など「くら」が付く地名が多いが、「くら」は倉庫ではなく「座(くら)」のことで神の御座所を意味し、空飛ぶ神輿のことである。したがって、倉は鞍・車と同じである。安来市、安楽川、安芸など「安」の付く地名も多い。橋口氏は、安は「前」の転化した文字とみているが、私は鞍から革を取ったものではないかと思う。いずれにせよ「安」も宇宙船を表わす。

単に、「物」と呼ばれることもある。物は「惣」と書かれることもある。

橋野昇一氏が列挙しているUFO文字以外に、いささか私見を述べさせていただくと「月」が

(2) 宇宙船の動きを表わす文字

宇宙船の上昇・飛翔は、「と・べ」とばかりに「と」と読む字（戸、渡、登、都、土、十など）と「べ」と読む字（部、辺、方）で表わされる。

宇宙船の降下は、「降り、下り」が折り・織り・居りとも書けるので、折・織・居は降・下・落の字と同じで宇宙船の降下を表わす。落の代わりに「楽」を使うことも多い。

また、宇宙船を待つことは、松・祭・政などの文字を当て、「待ち」には町・街の字を当てる。「待ち」が訛って「持ち」になり、「もち」と読む持・望（望月）・用（用いる）の字も「待つ」という意味で使われている。

宇宙船の飛来は「来」の字の他に利・里という字が使われる。「迎える」は、迎の字以外に訓読みが似ている「向」や音読みが同じ「芸」が迎えるという意味で使われる。

(注29)



上記の表において橋野昇一氏は、「ジョウ」と「ショウ」と読む文字、丈・場・城・常・所・床・庄・沼などを降下を表わす文字のグループに入れているが、私は「ジョウ」または「ショウ」と読む文字は「戸」や「部」と同じように上昇を表わす文字と考えるべきではないかと思う。

上記の転化表を利用して、日本の地名の謎を解いてみよう。

①宇宙船を意味する地名

鎌倉（神奈川）、呉市（広島）、羽倉（広島）、只越（岩手、愛媛、福岡）、神鍋山（兵庫）、鍋越峠（宮城）、高玉（宮城）、船玉（茨城）、観音（全国各地）、六呂木（三重）、常六（高知）、雁股山（大分、福岡）、大物（滋賀、兵庫）・輪島（石川）・大輪島（鹿児島）・大呂（京都、鳥取、島根）は大きな宇宙船という意味。

笠置山（熊本、京都、岐阜、和歌山）笠興（かさおき）の転化。

串木野（鹿児島） 串は二機の宇宙船、木は興の転化文字、野は窺の転化文字。

錦江湾（鹿児島） 錦は金の転化文字、江は興の転化文字。

沖縄は、興名輪。 名は、夕と口から成り、どちらも宇宙船を表わす。

②光り輝く宇宙船を表わす地名

日立（茨城）、日羽（岡山）、矢光（岡山）、日前（ひのくま）（和歌山）、檜隈（ひのくま）（奈良）、日比谷（東京、高知）日火矢の転化、由比ヶ浜（神奈川）、有明海（九州西部）、赤穂（兵庫）、赤羽根（群馬、長野など全国各地）、日置（鹿児島）日興（ひおき）の転化

③高速で飛ぶ宇宙船を表わす地名

矢玉（山口）、矢口（宮城、茨城、千葉など）、矢熊（広島）、早口（秋田）、速日の峰（宮崎）、など。

金沢（石川） 金早輪という意味。「沢」は早輪（さわ）で高速で飛んでいる輪を表わす。

桜島（鹿児島） 早鞍（さくら）島という意味。

名古屋（愛知） 名は、夕と口の転化文字。屋は矢の代わり。

④三機の宇宙船を表わす地名

美和（静岡）、三輪（奈良）、箕輪（東日本に多い）、御笠浜（広島）、御蓋山（奈良）、品川（東京）、三股・三又（全国各地）など。

日本 日品（にほん）の転化と考えられる。

三重県 「重」は笠の転化文字。どちらも「かさ」と読むから。

⑤宇宙船を見るという意味の地名

只見（福島、岩手）、忠見（福岡）、玉見（兵庫）、笠見（鳥取）、観音寺（香川）、鈴見（石川）、倉見（全国各地）など。

和泉（大阪）、出水（鹿児島）、出見（高知）「出」は鼎の転化文字。

⑥宇宙船を待つ、迎える、入れる、取るという意味の地名

笠松（全国各地）、常松（全国各地）、常盤台（全国各地）、常盤平（千葉）

安芸（広島） 安は鞍、芸は迎から。巻向山（奈良）向は迎えるの意。

伊万里（佐賀） 伊は入（る）の意味、万里は鞠。

羽曳野（大阪） 羽（宇宙船）を引く野という意味。

鳥取県 鳥（宇宙船）を取るの意。 笠取山（愛媛、埼玉、山梨）も同じ。

⑦宇宙船が降下する、落ちる、着く、来る

下呂（岐阜）、下総（千葉）「総」は惣の代わり。下館（茨城）館は立（て）の意。

安来（広島）、湯来（広島）、車折（京都）、雲折（静岡）

邑楽郡（群馬）、落船山（北海道）、興居島（愛媛）

甲突き川（鹿児島）興が着く川の意。

⑧宇宙船が飛ぶ、上昇する

神戸（兵庫）、能登（石川）、鶴戸（宮崎）、穴戸（山口）、京都「京」は興から。

字部（山口、奈良）、物部（全国各地）、余部（兵庫）「余」は興から。

小豆島（香川）、京丈山（熊本）、利根川（関東）戸音川の文字を変えたもの。

このように見ていくと日本中が「宇宙船が見たい」、「宇宙船よ、来い」、「宇宙船よ、飛べ」とかまびすしく叫んでいることがわかる。日本という国はSF的なおかしな国なのである。車、飛行機、携帯電話、コンピューター、カメラ、コピー機……今の私たちの生活は機械で溢れている。電気を主な動力源とするこのようなハイテク文明は20世紀になってから開花したが、飛鳥時代の堂塔や宇宙船象形文字の存在から判断すると、先史時代に現在のレベルを上回るハイテク文明が存在したとしか考えられない。

先史時代に存在したハイテク文明は何らかの理由で滅び、人類は4千年以上ローテクの不便な生活を余儀なくされたが、一部の人間たちは先史時代のハイテクの知識や機械の設計図を持っていた。日本にその知識を伝えたのが秦氏だったのだ。飛鳥文化が花開いた推古時代はまさしく「古いものを推す」時代で、消えた超古代文明社会の姿を垣間見せたのだ。

第六章 聖書の中の21世紀テクノロジー

現在より高いレベルの科学技術が太古の時代に存在したという仮説の支えとなる記述が聖書の中にある。それは、ヤコブの梯子、契約の箱、エゼキエルの幻視、ベツレヘムの星である。

(1) ヤコブの梯子 — 宇宙エレベーター？

「創世記」第28章（10 - 12）に次のような記述がある。

さてヤコブはベエルシバを発って、ハランへ向かったが、ある所に着いた時日が暮れたので、そこで一夜を過ごし、その所の石を取って枕とし、そこに伏して寝た。時に彼は夢を見た。一つの梯子が地の上にたっていて、その頂は天に達し、神の使いたちがそれを上り下りしているのを見た。

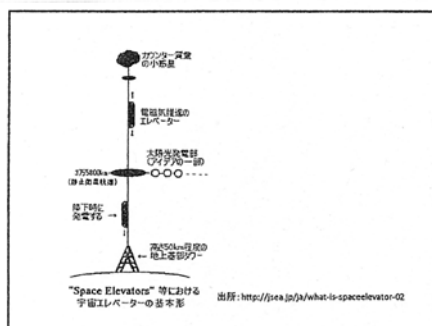
(注 30)



ブレイク「ヤコブの梯子」 大英博物館(イギリス/ロンドン)

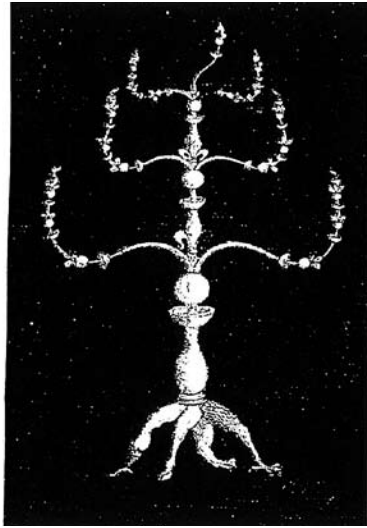
天地を結ぶ梯子は、ヤコブが夢の中で見たものと書かれている。が、天地を結ぶ梯子はじっさいに現在開発中で、宇宙エレベーターとか軌道エレベーターと呼ばれている。ヤコブは宇宙エレベーターを目撃したが、自分が見た物が信じがたいものだったので、夢として語ったのかもしれない。宇宙エレベーターは、静止軌道にある人工衛星から地球側にケーブルを少しずつ下ろし、その先端を地上の発着拠点（アース・ポート）に繋ぐというものである。ケーブル自体の重さから人工衛星が降下しないように、反対側にもケーブルを伸ばし、適当な重さのアンカーをつけてバランスを取る。宇宙エレベーターの着想者は「宇宙旅行の父」と呼ばれているコンスタンチン・E・ツィオルコフスキー（1857 - 1935）が、すでに 1895 年に自著の中で大胆なアイデアを披露している。しかし、これまで宇宙エレベーターのケーブル材料となりうる十分な強度のある物質がなかったため、宇宙エレベーターは単なる SF の素材や未来工学の概念的なものにすぎなかった。ところが、1991 年に鋼鉄の 180 倍の強度を持つカーボンナノチューブが発見されたことで実用化可能と言われるようになった。現在、2031 年 10 月 27 日開通を目指して米国の企業が NASA から援助を受けて研究開発を行っている。(注 31)

(注 32)



筆者は、宇宙工学に関してはまったくの素人であるが、宇宙エレベーターを試作していくと、最終的にはメノラー（ユダヤ教の神殿儀式で用いる7本枝の燭台）のような形になるのではないかと思う。最も安全で沈まない大型船の黄金比は、ノアの箱舟の長さ、幅、高さの比率とちょうど一致した。「出エジプト記」（第25章31 - 38）に詳細に書かれている金箔をしたメノラーの作り方は、なにか巨大な機械の建設法の説明のような感じがするのである。

（注33）



（2）契約の箱 — 無線通信機

契約の箱の作り方は、「出エジプト記」第25章（10 - 21）に書かれている。純金で覆われた契約の箱は、神社の賽銭箱くらいの大きさで、その純金製の「贖いの蓋」の上には翼を広げて跪いている二人の天使（ケルビム）が向かい合わせで置かれている。箱の中には、二つのケルビムの間から神の指令が聞こえてくるように「あかしの板」が納められている。つまり、契約の箱は、単に三種の神器を納める聖櫃ではなく神と人間を結ぶ無線だったのである。「あかしの板」というのは、現代的表現をすれば電子回路基板で、ケルビムはスピーカーかアンテナというところだろう。

契約の箱は、取り扱いに細心の注意を要する非常に危険な箱だった。ダビデがウザとアヒオに契約の箱を運搬させたとき、牛が躓いて箱がひっくり返りそうになったので、ウザは慌てて手で箱を押さえたが、その瞬間即死した。「サムエル記下」（第6章6 - 7）神とはハイテクノロジーを持って地球に飛来した宇宙飛行士だったという説（古代宇宙飛行士説）を唱えているエーリッヒ・フォン・デニケン（1935 - ）は、この事件を契約の箱が帯電していたこと、つまり機械であったことの証拠としてあげている。^{（注34）}

ウザが感電死する以前、約60年前（BC1031年）、ペリシテ人が契約の箱をイスラエルから奪い、アシドドの町に持ち去ったとき「契約の箱は帯電していた」だけでは説明できない怪奇現象

が発生している。ペリシテ人は、契約の箱をダゴン神の像の傍らに安置するが、箱の恐ろしい力でダゴン神の像は倒壊する。さらに、アシドドの人々の身体に腫れ物ができはじめたので、契約の箱を恐れたペリシテの領主たちは、箱を別の町ガトへ移すが、そこでも再び町の人々は老若を問わず身体に腫れ物ができて苦しむ。あたかも放射性廃棄物のように忌み嫌われるようになった契約の箱は、次にエクロンという町に移されることになるが、エクロンの住民たちが箱の搬入に大反対したため、結局、契約の箱はイスラエルに返還されることになる。ペリシテ人の領主たちは、賠償の捧げ物として人の災いを表わす腫れ物と大地を荒らすネズミの金の模型をそれぞれ5個ずつ箱の中に納め、契約の箱とともに牛車に乗せてイスラエルに送る。しかし、契約の箱を迎え入れたイスラエルの町ベト・シエメシュでも、箱は災いをもたらす。好奇心にかられて箱の中をのぞきこんだ者70人が相次いで死んだのである。「サムエル記上」(第5章、第6章)

腫れ物が悪性腫瘍なら契約の箱からは強い放射線が出ていたということになる。

不可解なことは、ペリシテ人がおかしな腫瘍とネズミなどの金の模型をイスラエル人への賠償の捧げ物として送ったことである。へんてこなプレゼントである。

主はモーセにイスラエル人から献上してもらいたい物を列挙している。「出エジプト記」第25章(1-7)

主は、いろいろな物を求めているが、第一に金、その次が銀と青銅である。神様は金が好きだという信仰は世界各地にある。何故、神様は金が好きなのだろう。

古事記によると、仲哀天皇(在位192年～200年)は、西方にある金銀が豊富な新羅を征服せよという神託を受けるが、この神の命令を無視したため立ち所に殺されたという。

夫の死後、妻の神功皇后が代わりに新羅に遠征し、新羅と百済を降伏させたという。神は天皇を殺すほど何故黄金を求めたのだろうか。アクセサリーでも作るのだろうか。いや、そうではない。神がスペースクラフトを操る宇宙飛行士だと仮定するならば、金は機器などのコーティングのために必要なのだ。具体例をあげると、先述した宇宙エレベーターも上空数百kmまでは、ケーブルの構成物質が酸素原子と反応して劣化するのを防ぐために貴金属で薄くコーティングする必要がある。宇宙船の窓も宇宙線を遮断したり、宇宙船内の空気を守るため金の粒子でコーティングしなくてはならない。だから神は金を人間から求めたのだ。古代人は、神が切実に金を必要としていたことを知っていたので、黄金で作った物を神に捧げて自分たちの悩みを解決してもらっていたのだろう。そう考えれば、ペリシテ人の奇妙な行動も理解できる。

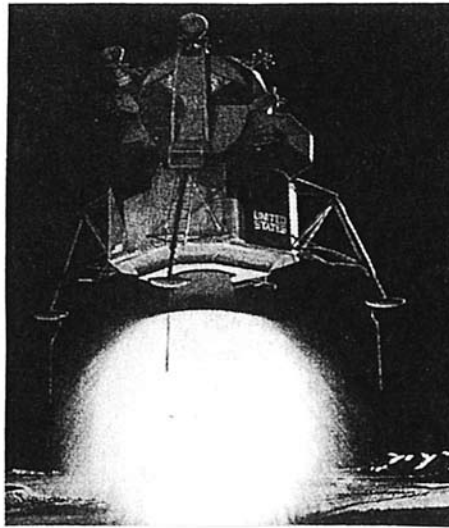
ウザが死んだ後、ダビデ王は契約の箱を恐れてオベデエドムという名のガト人に押し付ける。ところが不思議なことにオベデエドムの家の者は感電死したり腫れ物ができるところか、神の祝福を受け、契約の箱を預かった3ヶ月間おおいに繁栄する。それを知ったダビデ王は、すぐに契約の箱を取り返し、自分の町に担ぎこんだという。「サムエル記下」第6章(10-16) 契約の箱は、まるで人間をからかうように所有者によって性質を変え、人間に禍福をもたらす不思議な箱だったのである。

(3) エゼキエルの幻視 — スペースクラフト

BC602年4月5日、ケバル川のほとりでエゼキエルが空を見上げたとき、天が裂けて神の幻を見た。「エゼキエル書」第1章に書かれている。エゼキエルは一体なにを見たのか。4段落から引用する。

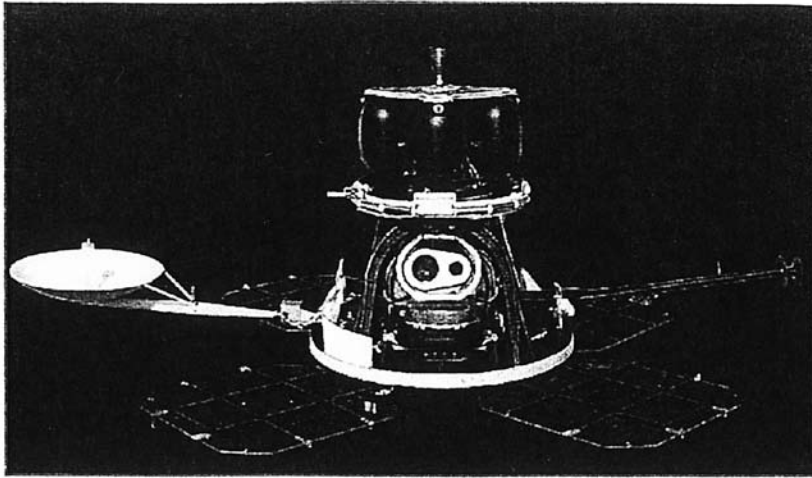
わたしが見ていると、見よ、激しい風と大いなる雲が北から来て、その周囲に輝きがあり、たえず火を吹き出していた。その火の中に青銅のように輝くものがあった。

(注35)



その火の中に4個の生き物にてなる、おのおの1個の形が見え、人間の形のようなであった。おのおの四つの顔があり、おのおの四つの翼あり。その足は直なる足。その足の裏はまるみを帯びて、磨かれた胴のごとくに光った。その生き物の四方に翼の下に人の手があった。この四つの者は、みな顔と翼が持ち、翼は互いに連なり、行くときは回らずにおのおの顔の向かうところにまっすぐに進んだ。顔の形は、おのおのその前方に人の顔を持っていた。四つの者は、右のほうに獅子の顔を持ち、左のほうに牛の顔を持ち、また後ろのほうに鷲の顔を持っていた。その翼は高く伸ばされ、その二つは互いに連なり、他の二つをもって体を覆っていた。彼らは、おのおのその顔の向かう所へまっすぐに進み、進むときには方向転換しない。この生き物の内には、燃える炭の火のような物があり、松明のように生き物の中を行き来している。火は輝いて、その火から、稲妻が光った。生き物は稲妻のように速く移動していた。(5 - 14)

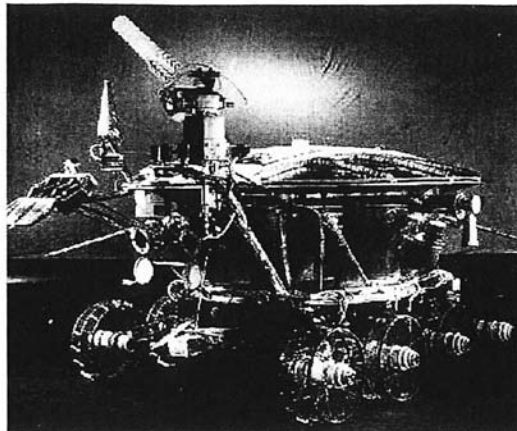
(注 36)



Lunar Orbiter Spacecraft (Length: 2m ,Diameter: 1.5m ,Dry mass: 385.60 kg ,Power: Solar cell battery)

私が、生き物を見ると、4個の生物の傍らにそれぞれ車輪があった。車輪は輝くターシス石のようである。その4個の形は、皆おなじで、車輪の中に車輪があるように造られていた。その進行方向は、四方で、進むときは方向転換しない。輪縁があり、その回りには多くの目があった。生き物が進むときは、車輪はついて行き、生き物が地を離れるときは車輪もまた上がる。(15 - 19)

(注 37)



Lunokhod (A)/Luna-21

よく文章と写真を見比べていただきたい。エゼキエルが目撃したものは、絶対に生き物ではない。明らかに精巧な機械だ。現代的表現を使うと月着陸船、月探査機、月面探査車によく似たスペースクラフトだ。

(4) ベツレヘムの星 — 人心を透視する宇宙船

新約聖書「マタイによる福音書」第2章には、東方の三博士、カスバル、バルタザール、メルキオールをイエス誕生の地に導く謎の飛行物体「ベツレヘムの星」が登場する。エルサレムに到着した東方の三博士は、ヘロデ王に謁見し星からユダヤ人の王の誕生を告げられたことを話す。ヘロデ王は、自らの地位を脅かす赤ん坊が生まれたことを知り、赤ん坊の殺害を決意するが、巧みに殺意を隠して、三博士を利用してイエスの居場所を突き止めようとする。

そこで、ヘロデは、秘かに博士たちを呼んで、星の現れたときのことを詳しく聞き、彼らをベツレヘムに遣わして言った、「行って、その幼子のことを詳しく調べ、見つかったら私に知らせてくれ。私も拝みに行くから。」彼らは王の言うことを聞いて出かけると、見よ、彼らが東方で見た星が、彼らより先に進んで、幼子のいる所まで行き、その上でとどまった。彼らはその星を見て、非常な喜びにあふれた。そして、家に入って、母マリアのそばにいる幼子に会い、ひれ伏して拝み、また、宝の箱をあけて、黄金・乳香・没薬などの贈り物をささげた。そして、夢でヘロデのところに戻るなどのお告げを受けたので、他の道を通って自分の国へ帰った。(7 - 12)

ベツレヘムの星も現代的表現をすると UFO であるが、単なる天翔る宇宙船ではなくテレパシーで人間と交信したり、人間の腹心を読む力を持っていたのである。何とも恐ろしい力を持った宇宙艇である。

後書き

日本人とユダヤ人は遠くの過去から来た未来人である。ユダヤ系日本人の歴史は、二千年でなく四千年以上ある。温故知新、日本人が自らの祖先は何処から何の目的で日本に来たのかを知り、遠くの過去から生きることが、日本という国が遠い未来まで続いていくことにつながると思う。世界最高レベルのテクノロジーを持つ日本人とユダヤ人は、自らのテクノロジーを人類の繁栄と地球のかけがえのない自然を守るために利用すべきで、過去の過ちを繰り返してはならない。

世界の縮図のような形をしている日本は、大昔に世界の中心であったか、将来、世界の都となることが運命づけられている国なのだろう。God bless Japan.

出典

- (注 1) 清川理一郎『猿田彦と秦氏の謎』（彩流社）2003年、p.170
- (注 2) 飛鳥昭雄、三神たける『失われた古代ユダヤ王朝大和の謎』（学研）2006年、p.260
- (注 3) <http://academy6.2ch.net/test/read.cgi/min/1159451054>
- (注 4) 清川理一郎前掲書、p.162
- (注 5) 『Wikipedia』「兵馬俑」の項
- (注 6) 久慈力『シルクロード渡来人が建国した日本』（現代書館）2005年、p.16
- (注 7) 飛鳥昭雄、三神たける『失われた原始キリスト教徒「秦氏」の謎』1998年。p.131
- (注 8) 前掲『失われた古代ユダヤ王朝大和の謎』、p.285
- (注 9) 久慈力前掲書、p.22
- (注 10) 久保有政『ゲマトリア数秘術』（学研）2003年、p.19
- (注 11) <http://sungod2012.blog96.fc2.com/blog-category-12.html>
- (注 12) 前掲『失われた古代ユダヤ王朝大和の謎』、p.70
- (注 13) 同上、p.59
- (注 14) 関田寛雄『図解雑学 聖書』（ナツメ社）2005年、p.161
- (注 15) 小林恵子『聖徳太子の正体』（文芸春秋）1990年、p.100
- (注 16) <http://homepage3.nifty.com/btocjun/rekisi%20kikou/houryuuji/1-5juutou%20nazo.htm>
http://www.justmystage.com/home/overheadtml/IMG_0087-2.jpg
- (注 17) http://img.4travel.jp/img/tcs/t/album/lrg/10/31/60/lrg_10316084.jpg
<http://euro.navi-club.jp/images/kojou/JPG>
http://images.google.co.jp/imglanding?imgurl=http://eegg.img.jugem.jp/20060316_14
- (注 18) 中興塔は、『台湾バスターガイド 2009年版』（成美堂出版）p.115
<http://images.google.co.jp/imglanding?imgurl=http://pds.exblog.jp/pds/1/200410/29/6>
- (注 19) <http://www.dkimages.com/discover/previews/860/45045943.JPG>
- (注 20) 榎本秋『徹底図解 古事記・日本書紀』（新星出版社）p.152
- (注 21) 小林久三『異説の日本史』（世界文化社）p.20
- (注 22) <http://denwakyoku.jp/dendengu.html>
- (注 23) 同上
- (注 24) 『Wikipedia』「熊野速玉大社」の項
- (注 25) 『Wikipedia』「神倉神社」の項
- (注 26) <http://fl.aaa.livedoor.jp/~megalith/singu5kamikura.html>
- (注 27) 橋野昇『UFO その真相』たま出版 1996年
- (注 28) 同上、p.202-207
- (注 29) 同上、p.208
- (注 30) 関田寛雄前掲書、p.73
- (注 31) 『Wikipedia』「軌道エレベーター」の項
- (注 32) <http://jsea.jp/ja/what-is-spaceelevator-02>
- (注 33) ユダヤ歴史新聞編纂委員会編『ユダヤ歴史新聞』
- (注 34) エーリッヒ・フォン・デニケン『未来の記憶』（角川書店）p.65
- (注 35) 飛鳥昭雄、三神たける『アポロ計画の謎と月空洞論』（学研）p.33
- (注 36) http://www.masaakix.interlink.or.jp/apollo/d_orbiter/1o-1lunar-orbiter_sc.htm
- (注 37) http://www.masaakix.interlink.or.jp/apollo/d_luna/luna-21/lunokhod2a-full.htm

